

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第4回 第2.6.3節～第2.10節

2018年2月15日

小田 勝

連載第4回は、52頁「2.6.3 「に」格も「を」格もとる動詞」から。用例(1)は「恋ひ渡る」なので、単純語「恋ふ」の例をあげる。

- ・ a 君に〔尔〕恋ひいたもすべなみ^{あしたづ}蘆鶴^ねの音のみし泣かゆ^{あきよひ}朝夕にして（万456）
- ・ b つれもなき人を恋ふとて山彦のこたへするまで嘆きつるかな（古今521）

その他の類例。

- ・ a 常よりも〔寢レテイル〕わが面影に恥づるころなれば（源・総角）
- ・ b 御前なる人々は、この宮をばことに恥ぢ聞こえて（源・総角）
- ・ a 〔嬉シサノ〕置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなた（＝源氏ノ邸）
に向きて喜び聞こえける。（源・蓬生）
- ・ b 輿の内をころび出でて、天に仰ぎ、五体を地に投げて、叫ばんとすれども声も無く（保元）

第2.6.4節用例(6)にあげた「背く」も、二格もヲ格もとる動詞であった。

- ・ 教へに背き理に違ふ〔背^キ教^ニ違^リ〕（東大寺諷誦文稿）

53頁1～3行目、「{に／を} 別る」の使い分けについては、「{に／を} 離る」も同様である（工藤力男1978）。「に-別る」については、次例も参考となる。

- ・ 心にもあらず、人に別れて（業平集・詞書）

意義によって格支配を異にする例では、「旅にまかりける人に装束つかはすとて」（後撰1328・詞書）がこれから旅立つ意、「秋、旅をまかるに、花見にとどまり侍りて」（能宣集・詞書）が旅行中の意、というものもある。

53頁「2.6.4 現代語と格支配の異なる動詞」では、現代語と「格配置」の異なる例にも注意される。例えば、

- ・ 帯の端のいとをかしげなるに、^{くちなは}蛇^{かた}の形をいみじく似せて（堤・虫めづる姫君）
- は、現代語なら「帯を、蛇の形に似せて」のように表現されるだろう。「年ごろもかのわたりに心をかけて」（源・若菜上）も、現代語では「何年もあのお方（＝雲居雁）を心にかけて」という方が自然なようである。この問題については、第12.13節も参照。

54 頁「2.6.5 複合動詞の格支配」。言葉が足りなかったが、ここでいう複合動詞とは、いわゆる「語彙的複合動詞」のことである。類例、

・[監ハ] いよいよあやふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。(源・玉鬘)

もちろん右側主要部の場合でも、「夜の町を酒を飲み歩く」のようなタイプのものもある(影山太郎 1993:107)。

・[源氏ハ] やがて馬引き過ぎて(=馬ヲ引イテ通り過ギテ)、[明石ノ君ノ邸デハナク、京ニ] 赴きぬべく思す。(源・明石)

古典語における複合動詞の格支配については、詳しい調査が必要である。

56 頁「2.8 代動詞」。「たづねつる宿は霞に埋もれて谷の鶯一声ぞする」(後拾遺 23) について、顕昭『後拾遺抄註』(1183 年)は「『一声ぞ鳴く』と詠まずして、『一声ぞする』と詠める、秀逸なり。」という。こんな「す」は提喩的表現ということなのだろう。

58 頁の用例(16)、「御心よりありし」は誤記で、正しくは「御心より起こりてありし」なので訂正する。

58 頁「2.9 軽動詞」の用例(3)以下は、用例(1)(2)とは異質である。「死にす」「消えす」「絶えす」のような形を「再サ変動詞」と呼び、次のような節を立てよう。

2.9' 再サ変動詞(新設)

動詞の連用形に「す」を付加して、サ変動詞として再構成されることがある。

(1)~(5) 58 頁用例(3)~(7)をここに移動。

(6) いさなとり海や死にする山や死にする死ぬれこそ海は潮干て山は彼枯れすれ(万 3852)

(7) 見れどなほ野辺に枯れせぬ玉ざさの葉分けの露はいつも消えせじ(続古今 1781)

◆連用形の反復も再サ変動詞化することがある(→§14.3.4)。

「2.10 複合動詞」の 59 頁、「V 打消型」としてあげたものは、古典語では色々問題がありそうなので、別に節を立てる。

2.10.1 打消型複合動詞(新設)

現代語の「見落とす」のように、後項が、前項の表す動作の成立を打消すタイプの複合動詞がある(山王丸有紀 1996 参照)。

- (1) おほかた殿上人、女房、さるまじき女官までも、さるべき折のとぶらひせさせ給ひ、いかなる折も必ず見過ぐし 聞き放たせ給はず (大鏡)
- (2) それが飛びそこなひて、この溝に落ち入りたるなり (宇治 196)
- (3) 世にふりぬることも、おのずから聞き漏らす (=聞き落トス) あたりもあれば (徒然 234)

現代語の感覚で打消型の複合動詞に見える語形が、古代語では別の意を表すことも多いから、注意が必要である。例えば、次例(4)の「見過ぐす」は(1)と異なり「見ながらそのまま過ごす、そのままそっとしておく」の意、次例(5)の「聞き漏らす」は(3)と異なり「人が聞いて、その噂を人に伝える」の意である。

- (4) 今少しものをも思ひ知り給ふほどまで [女三宮ヲ] 見過ぐさむ。(源・若菜上)
- (5) さりとてかくのみやは、人の聞き漏らさむこともことわりとはしたなう、この人目もおぼえ給へば (源・夕霧)

次例の「聞き落とす」は、「聞いて^{さげす}蔑む」の意。

- (6) [螢兵部卿宮ハ私(玉鬘)ノコトヲ] あへなくあはつけきやうにや聞き落としけむと、いと恥づかしく (源・若菜下)

複合動詞「言ひ消つ」には、(7)のように、「言う」ことを止める」の意と、(8)のように「反論を言う」の意とがある。

- (7) ところどころ言ひ消ちて、いみじくものあはれと思ひ給へるけはひなど (源・早蕨)
- (8) わざとはなくて言ひ消つさま、みやびやかによしと聞き給ふ (源・松風)

上述の用例(5)のようであるから、59 頁の「V 打消型」の語例「聞き漏らす」を、『源氏物語』から例を拾うと」としてあげたのは適切ではなかった。

[出典追加] 東大寺諷誦文稿②平安初期(824-834 頃か) ③勉誠社文庫 12/業平集③新編国歌大観 3⑤在原業平関係歌を集めたもの